

1 今年度の研究の方針

昨年度まとめた新しい社会科の視点に沿って授業検討を重ね、評価にも力を入れて研究をしていく。

【評価の研究の視点】

- (1) 計画作成に生かす評価（診断的評価）
- (2) 指導に生かす評価（形成的評価）
- (3) 成績評価に生かす評価（総括的評価）

今年度の旬会では、「新しい社会科の授業づくり」を目指し、様々な実践を提案・検討を重ねた。今年度は、評価に注目し、実践を行った。

まず初めに、指導者である北俊夫先生から、以下のような評価に関する考え方が示された。

2 研究の指針 「指導に生かす評価」の重視

(1) 学習評価の新しい考え方

文部科学省は平成 31 年 3 月 29 日付けで出した通知において、学習評価を「日々の授業の中で児童生徒の学習状況を把握し、その結果を指導の改善に生かすことが重要だ」と強調した。これにより、学習評価に対する考え方が大きく転換した。従来は「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」が並列で重要視されてきたが、今回の通知では特に「指導に生かす評価」が強調されている。

「指導に生かす評価」とは、指導と評価を一体化させることで、成績評価（評定）とは明確に区別されるべきだ。これに基づいて、学習指導案作成が求められる。日常の学習評価では、評価結果を指導に反映させることが重要だ。これは PDCA サイクルの「評価→指導」に重点を置き、評価が次の指導のスタートとなることを意味している。「指導の改善に生かす評価」とは、学習の目標に照らして評価し、つまづいている児童には支援を、目標達成した児童にはさらに発展的な学習を促すことだ。この考え方は、学習評価を単なる成績評価にとどまらず、子ども一人一人の可能性を引き出すための支援とするものだ。

(2) 学習指導案作成のポイント

学習指導案を作成する際には、評価を 3 つの段階に分けて考える必要がある。

①計画作成に生かす評価（診断的評価）

診断的評価は学習開始時に行い、児童がすでに持っている知識や技能を把握する。これを基に、指導計画を作成する。

②指導に生かす評価（形成的評価）

形成的評価は学習の過程で行われ、児童の学習状況をリアルタイムで把握する。例えば、課題への取り組みや理解度を評価し、その結果を指導に生かす。つまづいている児童には再指導を、理解した児童には次のステップを提案する。

③成績評価に生かす評定（総括的評価）

総括的評価は単元末に行われ、学習成果を評価する。知識・技能、思考・判断・表現、態度の観点に基づき評価を行い、結果は指導要録や通知表に記載される。

(3) 「指導に生きる評価」が機能している授業

「指導に生きる評価」が実践されている授業では、教師の評価力が直接授業の質に結びついている。優れた教師は、子どもの反応や疑問を大切にし、その都度授業計画を柔軟に修正する。教師は、事前の実態調査結果を基に指導計画を立て、学習過程でつまづいている児童には適切にサポートを行う。その結果、子どもの個性的な思考が学びを豊かにし、教師の指導が子どもの成長を支える。

このように、学習評価は単に成績をつけるものではなく、指導を改善し、児童生徒の学びを深めるための大切なツールだ。

3 研究の実際 第6学年「過去と未来～歴史学習とこれからの私たち～」から

○目標 (1時間目/3時間扱い)

時代ごとの事象をもとに、庶民の生活の変化を理解することができる。

○指導計画

	○教師の発問 ・ 予想される反応	資料	・ 指導上の留意点 * 評価計画
つかむ5	○これまでの歴史の学習で印象に残った内容がありますか。 ・戦時中は、軍国主義でみんながつらい目にあった。 ・織田信長が武田軍をコテンパンにした。 ・外国との関係は、現在が一番良さそう。 ・文化の目は、室町時代のイメージ。 歴史の学習でどのようなことを学んだのか話し合おう。	1 これまでの学習ノート	・ここでは、4つの目(政治・庶民生活・外国・文化)を意識し、テンポよく意見交流する。様々なことを学習したことを思い出し、課題意識を高める。
調べる30	○グラフ資料の縦軸と横軸は何ですか。 ・横軸は時代。縦軸は幸福か不幸になっている。 ○それぞれの時代の特徴を表す画像やグラフの資料を送ります。資料から庶民がどのような生活していたのか考え、グラフで表しましょう。 ・縄文と弥生だけで比べると米作りが始まり、庶民は幸福になったといえそう。 ○グループでお互いのグラフを見せ合い、どうしてそのような変化にしたのか理由を話し合おう。その後、全体で交流しましょう。 ・奈良時代は、聖武天皇がみんなの幸せを願って大仏を造らその思いは届いていたと思う。平安時代は、貴族だのかも。 ・鎌倉・室町・安土桃山は、平安より不幸かも。戦いが起きているし。戦争の時よりはまし。 ・室町だけは違うと思う。ちょっと上向き。農具も発達し、文化が栄えているし。 ・江戸は、厳しい政治をしていたから辛そう。 ・明治・大正は右上がり。やっと今に近づいた。 ・昭和の戦争中は最悪だよ。そのあと、最高になる。	2 庶民の生活の変化を記入するグラフ 3 各時代の特徴を表す図・地図・グラフ	・縄文・弥生は全体短く全体で確認し、活動の見通しをもてるようにする。歴史全体を鳥の目でみるように問い返し、多様な見方や捉え方ができることを意識できるようにする。 ・資料や既習の事実をもとに話し合うようにする。「○○(事実)があったから□□(考え：本時ではグラフの変化)だと思う。」などのように、意見を交流できるようにする。 ・級友との意見の違いをとくに交流する。 ・全体交流の際は、おそらく時間がない。基準となる一人の児童のグラフをプロジェクターに写す。そのグラフとの細かな違いや理由を中心に交流する。その際に様々な見方ができていることを価値付ける。
まとめる10	○話し合いをもとに、今日の課題について考えをまとめましょう。また、そのことは今を生きる私たちとどのような関わりがあるのでしょうか。 ・人によって似た事実からでも考えが違っておもしろかった。庶民の生活は時代ごとに浮き沈みをして変化していて、そのつながりの先に私たちが生活をしていると思った。		※庶民生活の変化を捉えているかを評価するとともに、つまづきのある児童には映写したプロジェクターのグラフをもう一度見直させる。

指導案上で、単に観点別評価を記すのではなく、つまづきのある児童には、具体的にどのような指導を行うのかを明記した表記にし、指導に生かすようにした。(形成的評価)

3時間目；児童の振り返り

K.A 自己をみつめなおす→自分たちがどうあるべきか将来を考える。

U.A 自分を見直す→国の在り方を考える・先人の思いを伝える

②指導に生かす評価（形成的評価）③成績評価に生かす評価（総括的評価）でいうと、①指導計画に生かす（診断的評価）に関する提案が少なく、まだ課題が残る。学年の年間指導計画、児童の興味関心、実態を踏まえて、児童がより主体的に学べる授業作りを目指していきたい。

今後も評価についての研究を続けていくが、昨今「自由進度学習」などの児童が主体的に学べる学習方法への関心が会員にも高まっている。そこで、次年度以降への研究の視点として、北俊夫先生より、複線型社会科授業についての視点を指導していたので、以下に示す。次年度は評価と共に学習方法についても研究をつづけていく。

4 今後に向けて

複線型社会科授業の意義と課題

社会科教育は、子どもたちが社会の仕組みや歴史、文化などを学び、より良い社会の一員として生きるための力を養う重要な分野だ。しかし、従来の一斉型の教育方法では、すべての児童に対して均一の進度や学習内容を課すことに限界があり、個別の学びを重視する必要性が増している。そこで注目されるのが「複線型授業」だ。この授業方法は、子どもたちが自らの学びを主体的に進めていくことを目的としており、個々の学習者に合った学びの進め方を選択できるようにすることが特徴だ。以下では、複線型社会科授業の意義と課題について考察する。

(1) 「複線型」とは何か

「複線型」という言葉は、授業における学習活動の進行の仕方を表すものだ。具体的には、子ども一人一人が自らの問題意識や興味に基づき学習を進めていくことを意味する。一般的な授業では、教師が設定したカリキュラムに従い、学級全体で同じ進度で進んでいくが、複線型授業では、学びの進度や進行の方法を生徒が選択できる点に特徴がある。つまり、子どもたちは、自分の興味や理解度に応じて学習の進め方を決めることができる。

これに対して、子ども一人一人の学習活動を見たときには、必ずしも「複線型」にはなっていない場合もある。というのも、個別に学習が進むものの、それぞれの子どもが行きつ戻りつしながら一つの課題に取り組んでいるため、学習過程自体は「単線型」に見えることが多いからだ。それでも、複線型の授業は、各児童の選択によって多様な学びの進行が可能になるため、個々の成長を支援するための方法として重要だ。

(2) 複線型授業の実際と背景

複線型の授業を実現するためには、教育内容や教材の選択、学習の進度の自由度が大きな鍵となる。例えば、社会科の授業においては、子どもたちにさまざまな資料や課題を提供し、それぞれが自分の興味や問題意識に基づいて学習を進められるようにすることが求められる。資料や教材は、一つのテーマについて異なる視点やアプローチを提供し、子どもたちが自ら選んで学びを深めていけるようにすることが重要だ。

また、「自由進度学習」という考え方も、複線型授業の一環として注目されている。これは、子どもが学習の進め方を自ら選び、計画的に学びを進めることを意味する。進度や進路を自己決定することによって、学びが個別化され、各児童が最も効果的に学べる環境を作り出す。

(3) 複線型授業が目指すもの

複線型授業は、単に学習内容の個別化を意味するだけでなく、学びに対する態度や考え方、さらには「生きる力」の育成を目指している。子どもたちは、授業を通じて自分で問題を見つけ、解決策を考え、選択し、実行する力を養うことが求められる。これにより、単なる知識の習得にとどまらず、問題解決能力や自己責任感を育てることができる。

選択と決定を行うことは、学びの自立性を高めるだけでなく、将来の人生における判断力を養うためにも重要だ。日常生活の中で直面するさまざまな問題や選択に対応する力を育むことができるため、複線型授業は単なる学習法の枠を超えて、子どもたちの生きる力を育む手段として評価されている。

(4) 子どもが選択する対象とその方法

複線型授業では、学びの進度や方法を選択することができる一方で、その選択に対しては責任も伴う。子どもたちは、何を学ぶか、どのように学ぶかを自ら決めることで、より主体的な学びを体験する。この選択の基準は、興味や関心だけでなく、必要性や優先順位、さらには制約条件を考慮した上で行われる。選択した内容に対する反省や修正も、学びを深めるために重要な過程となる。

例えば、歴史を学ぶ際に、同じテーマについて複数の資料を提供し、それらを比較検討して学びを深める方法も考えられる。資料には文章だけでなく、写真や映像、地図などさまざまな形態があり、子どもたちは自分に合った方法で学習を進めることができる。

(5) 複線型授業の課題と展望

複線型授業には多くのメリットがある一方で、いくつかの課題も存在する。まず、学力の差が広がる可能性がある。進度を自由に選べる一方で、理解が遅れている子どもたちが孤立することも考えられる。特に、個別の学びにおいては、他の子どもと学び合う機会が減少することもあり、協力や支え合いを重視する学校教育の理念とのバランスを取る必要がある。

また、目標設定の難しさも課題だ。複線型授業では、各自が異なる課題に取り組むため、学習の目標をどのように設定し、全員が共通の学びを得られるようにするかが重要だ。最低限の学力を保障するためには、学習指導要領に基づいた指導が求められる一方で、個別の学習を深めるための工夫も必要だ。

さらに、教師の指導力やサポート体制が課題として挙げられる。複線型授業では、教師が一人一人の学びを理解し、適切なアドバイスを与えることが求められる。しかし、全員の学びを個別に支援することは非常に労力を要するため、教師の負担が増えることも考慮しなければならない。

まとめ

複線型社会科授業は、子どもたちが自らの学びを選び、主体的に進めることを可能にする授業形態であり、個別化された学びを提供するための重要な手段だ。しかし、その実践には、学力の格差や教師の負担などいくつかの課題が伴う。これらの課題を克服するためには、授業計画や教材の工夫、教師の指導力の向上が必要不可欠だ。最終的には、子どもたちの学びの深さや成長を支援し、より良い社会を形成するための力を養うことを目指して、複線型授業の充実が求められる。